

「私の母は、一人娘の私と、一生一緒に住むものだ、と一人で決めている人」
「大学卒業以来、約六十四年間働いた」

◎「人に期待されない」という自由を得る

哲学者のエピクテトスが言ったことですが、「老年期こそ、実は学ぶのに最適な年月なのだ」と。退職してからの時間、さらに老年期に入ってから時間、したいことが何でもできる自由を得ている。人に期待されないというのは自由ということでしょう。

いくらでも積極的に学べるのですから、暇つぶしをしているのは時間のむだですね。勉強する楽しさというのは、魂を満たしていくものだと思います。

私は小学校1年生になって、初めて教室に入れられた時、火がついたように泣いた。おかしな子がいるものだ、と世間は思い、母は困り果てたことだろう。

私は自分の泣いた理由を説明できなかったし、世間にも誰一人として私の心理を代弁してくれる人はいなかった。私はその年頃で既に閉所恐怖症だったのである。

．．．

私がこういう恐怖症を持ったきっかけははっきりわかっている。まだ幼稚園に上がる前に、母にお仕置きされて、物置に閉じ込められたのである。私はほとんど戸を壊さんばかりに泣き暴れた。息ができない、と感じたからである。

小学校一年生の時の「泣き虫」は多分一週間ほどで、目立たない程度になった。私は高校生になると精神分析学の本を読み、自分の心理的成長過程の傷を自分で推測するようになった。他にも私の心は「満身創痍」だった。その自覚があったから、逆に私は警察沙汰になるようなことをしないで済んだのだし、小説を書くようにもなったのである。

結果は脊

柱管狭窄症だという。この病気は私の長年付き合ってきた人の中にも数人いる。重い道具を担いで歩いていた仲のいいカメラマンも同じ病気だ。長年生きて来て、六十三年も書き続けていれば、背骨くらい少しは変形するだろう、と私は思い、これは深く弄(いじ)らない方がいい、姑息な手段でやり過ごそう、どうせあと数年しか生きないのだから、と迷うことはなかった。歩くのが痛いだけで、私は年の割りに、他の不便がない。

うっかり手術などすると、脚のしびれや頻尿になる人などがあると聞いて、私は怖じけついた。私が気楽にアフリカなどに行けるのも、こういう健康上の不自由がないからなのである。だからこのまま生きたい、と思っている。

私の母は、一人娘の私と、一生一緒に住むものだ、と一人で決めている人だった。私の結婚相手が寛大な性格で「まあ、それもいいだろう」ということで済んできたからいいよなもの、私は時々母の独占欲に辟易することもあった。既に少し惚けかかっていたのかもしれないが、娘を「私物化」することに少しも遠慮しなかった母は、旅先まで私を追いかけ、私が講演中だと言うのに、「ちょっとですから電話口に呼び出してください」と言ったこともあった。

その反動で、私は息子を自由にしてやるのが第一の義務だと思うようになった。私は女だから、母に取りつかれても、まあ何ということはない。しかし息子が母親の束縛に遇うことほど気の毒なことではない。母と息子は、適当な時に別れなければならない。私はそのことを、息子が小さいうちから、いつも心に銘じ続けた。母との生活の体験が、私にそう決意させていたのである。

◎客の会話の邪魔をするレストランの不作法

暁子さんと太一とで我が家の近くのフランス料理に行く。**レストランが会話の途中で食材の説明に割り込んだ**ので、珍しく朱門が怒った。こういう不作法はいつの間にか、すべての料理屋やレストランで起こっている。お客さまの会話のお邪魔をするとは、どういう神経なのか。材料も料理法も、聞かれたら答えればいいのだ。小説を出版した後で、これはこうして書きましたなどと読者に解説を付け加える作家はいない。小説は作品だけ、料理は味だけが、問答無用の結果。

ただ私に今までそんなドラマチックなことが起きなかったのは、私の中に分裂したものがあって、書くものでは、思いきり自分をさらけ出す心の用意もあるが、**実生活では世間の片隅にひっそりと生きる**のもわりと好きだからであった。太陽は明るく輝く眩しく熱い存在だから、その近くに寄っただけで危険なことだとは最初からわかっている。焼き尽くすほどの恋に溺れれば、必ず火傷する、と昔から人は言ったものなのだ。

それに自分だけが燃えてなくなるならまだいい。しかし時と場合によっては、死ぬほどの思いで近寄ったら、相手に迷惑がかかるだろう、と私はいつも恐れている。

◎人ははたして優しいか

自分は人に優しいから、今手にしているお握りの半分は、常に人に分けてやれるだろう、と言い切れる人は勇気がある。戦争中の厳しい食料難、**貧困の中では、普通の人間は、自分の持っているお握りは決して他人に取られないように隠して食べた**のである。

◎「さしたる充足感も不足感もない」生き方

気がつくと、この頃寝てばかりいる。どう自覚症状があるのかと訊かれると「だるいんです」と言っている。**熱は三十七度から三十七度五分止まり**。それでだるいのだろうと思う。

・・・

だるい理由はわかっているようにも思う。

私は大学卒業以来、**約六十四年間働いた**。病気をしなかったから、一月と休んだことがない。毎日毎日知的作業と肉体労働の双方ですることがあって、どれもあまり嫌なことではなかったから、私は生活とはこんなものだと思います、さしたる充足感も不足感もなしに生きて来た。私の生涯はいつもかなり受け身だったが、実は受け身だとも思わなかった。誰かが生きているということは、どの場合もそんなものだろうと思っていたのだ。

つまり私は疲れて来たのだろう、と思う。六十年間のなし崩しの労働というものは、多

分マラソン選手や登山家の疲労とは質が違ふのだろうと思う。

それで私は、来る日も来る日も、さぼることにした。幸いにして連載も数本しかないし、高熱があるわけではないから大変快い気分ですぼっていられる。本を読み、朝寝、昼寝、夕寝などしたい時に眠り、夜も眠る。夜だけ迷わず、家庭医から出された睡眠剤を一錠飲み、テレビを見ながら眠る。

◎不運や不幸を生かす知恵が必要

限りある生命と時間だからこそ、人間は賢くなり、生きるべき道を発見する。不運と不幸がいいわけではないが、それを生かす人間になる他はない。

◎どん底の気分を切り抜ける

夫が亡くなって三カ月ほど経った或る晩、私は本を読む気力を失った。そういう静かな夜、私たち夫婦は会話をして時間をつぶしていたものなのである。相手のいない夜、友だちに長電話をするという人もいる。私はそれだけは自分に禁じていた。自分の虚しさを埋めるために、お酒を飲んだり、麻雀をしたりするのと、長電話は同じようなものであった。

このどん底の気分も、私は現実的な方法で切り抜けた。テレビで、少し硬派の番組を見ることにしたのである。訳はついていたが、多くは、外国語の番組だった。そして自分の知らない世界が、あまりに多いことを覚えると、私は単純に感傷的になっていられない乾いた気分になれたのである。

私の友人は、或る日押入の整理をしていて、古いワンピースを見つけた。まだ着られるだろうか、と思って袖を通そうとしたが、昔の流行は袖ぐりがひどく小さかった。きついなあ、と思って脇の下を触った時、そこに異常なしこりを見つけた。乳癌発見の瞬間である。

この人はもともと大変健康で、気持ちも穏やかで明るい人だったので、手術を受けるというご難はあったが、それ以来ますます元気である。片方のおっぱいを取ったのに、なぜか手術後も同じ体重だった、というので、私たちは皆「どうしてよ。そんなおかしい算数はないじゃないの」と彼女を笑いものにして同情がなかった。

この人も厳密に暗く考えれば、片方の乳房になったのだから、五体満足とは言えない。しかし彼女はますます元気で輝いている。

もっとも男にもほとんど勇気のない人はざらにいて、暑いから（寒いから）、汚いから、病気が蔓延しているから、政治情勢が危ないから、遠いから、酒が飲めないから、食べ物に口が合わないから、医療設備が悪いから、などあらゆる理由で、**安全な日本にだけいたがる人が多い。**

私の実感によると、人生の面白さは、そのために払った犠牲や危険と、かなり正確に比例している。**冒険しないで面白い人生はない、**と言ってもいい。

◎要求したら得られないものとは

しかし考えてみると、優しさもまた、要求したら得られないものの典型である。「あの人に愛してほしい」という求愛の感情といっしょで、「私を愛してください」と要求したら、まず相手はうんざりして逃げ出す。

世の中には、追い求めたら逃げていき、求めない時だけ与えられるという皮肉なものが、意外と多い。優しさもまた同じだ。

優しくしてほしいと思ったら、自分が優しくする他はない。あるいは、周囲の状況や他人の優しさに敏感に気づき、感謝のできる人間になる他はない。

◎「これくらい我慢しょう」が、夫婦の愛情

「これくらい我慢しょう」というのが、夫婦の愛情ですね。そのくらいがいいんです、お互いに。無理しなくてもいいんですよ。いい加減に、相手の目をくらしながら生きていくのが、私は好きですね。そのほうが楽しいですから。

寛大さは必要です。寛大さがなかったら、夫婦生活、結婚生活は地獄になります。いちいち目くじらを立てて、すぐに怒ったりして。

思う通りにいかないことを笑って楽しむような空気がないと、いたたまれないでしょう。

◎「人と比べる」と不幸が生まれる

人と比べるところに、今の日本の不幸が潜んでいる、と思える時はありますね。私は、あまり比べない。だって、**できないことはできない**ですから。それは、私の大いなる甘さなんですけどね。私のできること、できないことって、範囲が決まっているんですよ。ほどほどでいいんです。

◎「なせばならない」のが人生

私たちの人生というのは、「なせばなる」ものじゃないんです。頑張ったって、どうにもならないことは多いと思いますよ。「なせばならない」のが、私たちの人生なんです。

皆、きれいなことばかりを追いかけてすぎる。私は、人間はとても不純な生き物だと思っています。不純な動機で動くのが人間なんです。そういう不純の中に、あるいささかの思いを生かし続けられれば、ありがたいとしなきゃならない。

◎人間はみんな少し無理をして生きるもの

年をとれば、どうしても誰かに頼らざるをえないことが出てきます。なんでも、自分一人で生きられる、というのは傲慢です。そこで難しいのが、自立と頼ることのバランスだと思うんです。

老人といえども他人に依存せず、自分の才覚で自立すべきだ、というのが私の考え方ですが、私は、人間はみんな少し無理をして生きるものだと思っています。**年をとった、身体の調子が悪くなったからといって、何でもやってもらおうというのは、おかしい。**

お金を稼がないと生きていけない現実もある。大きな荷物を背負った行商のおばさんは、もう昔の光景ですけどね。やっぱり生活があるから、腰が痛くてもやっていたんです。その程度のことは、人間やって当たり前でしょう。

みんな少し無理をするべきなんです。つらい思いをして、みんな生きているんですから。年をとっても、それは同じだということを知っておいたほうがいい。